

大学における経済生活設計学習の意義

- 対話を取り入れた学習の展望 -

経済生活設計学習の目的

家政学・生活科学系における経済設計学習の目的は、学生たちが自身や自家の経済生活を展望し改善する力、あるいは助言者として他の経済生活を指導する力を育むことにある。これは、すぐれて実用的な目的である。だが、経済設計学習には、もう一つ、かくれた意義がある。それは、人生や生活を具体的、实际的にみることを通して生活観を養ったり自己を再発見することである。

このように目的ないし意義が重層的であることによって、経済生活設計の学習が混乱することはない。むしろ、“数値合わせ”の域を脱して、豊かに展開するきっかけになるものと思われる。その一つの方向として考えられるのが、学生どうしの対話を多くとり入れた学習である。

本稿では、経済生活設計学習の対話的な展開について、3つの角度から考える。すなわち、まず、対話を取り入れた授業シラバスを示す。ついで、経済生活の設計が本質的に対話という方法を求めることについて述べる。そのうえで、現代の大学教育において対話型の経済生活設計学習が有意義になりつつあることにふれる。

経済生活設計学習のなかの対話

経済生活設計は、設計の主体（個人、家族、NPOなど）、時間の射程（中期、長期）、主題の広がり（生活の全体、一部分）においてさまざまである。たとえば、大学生生活の経済設



乗本 秀樹（のりもと ひでき）
（三重大学教育学部教授）

略歴

- 1950年 岡山県生まれ
- 1973年 京都大学農学部農林経済学科卒業
- 1979年 京都大学大学院博士課程農林経済学専攻単位取得退学
- 1979年 日本学術振興会奨励研究員
- 1981年 三重大学講師
- 1982年 三重大学助教授
- 1993年 京都大学博士（農学）
- 1999年 三重大学教授

研究テーマ

生活経営学の方法に関する研究

主な著書

- 『生活経営と福祉』（朝倉書店 2003年:共著）
- 『家庭科に学ぶ生活論と教育論』（家政教育社 2002年）
- 『システムと姿勢のライフ論』（同文館出版 1999年）
- 『持続的農村の形成』（富民協会 1996年:共著）
- 『家政知を考える』（昭和堂 1989年:共編著）

計は個人の生活全体に関する中期設計であり、良質野菜の産消提携計画は家族や地域の食生活部分に関する長期設計である。また、経済生活設計は個人や家族の安全や快適だけをめ

ざすのではなく、地域や社会の生活様式の創造や生活水準の向上にむすびつくものでなければならぬ。

このように経済生活設計は多様であるが、ここでは家族の長期経済設計に着目する。

1 経済生活設計学習の指導演

(1) 授業の目的

図表1には、長期経済生活設計の授業の進め方の一例を示している。第2回から第12回までの授業は、大きく2つの部分からなる。

すでに記入されている設計表Aをもとにして、記入のしかたを学ぶ。そのために、ローン、保険、税、物価などについて基礎的な計算法を知る(第2～8回)。

設計表Aを、より豊かな内容に組み替える。そのために、記入例を検討して改善提案し、再記入する。その結果をさらに再検討する(第9～12回)。

設計表A(図表2)では、次のような生活の主体が想定されている。

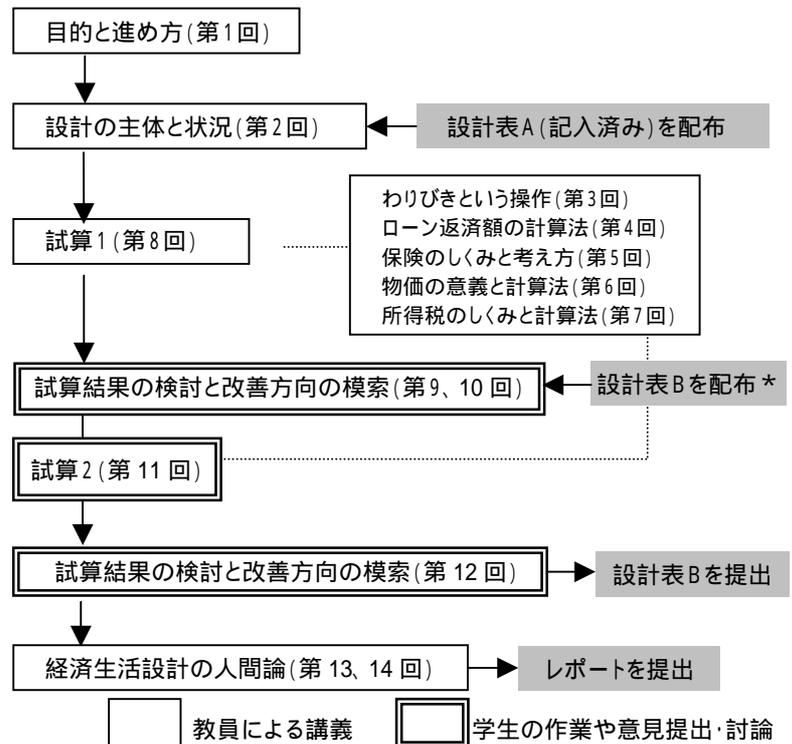
“夫は40歳で会社員、妻は38歳でパート従事。2人の子供がいる。地方都市に住んでおり、人並みの教育、最低限の自動車利用、ときおりの家族旅行は欠かせないと考えている。そして、今、住宅(一戸建て・新築)を持つとしている。住宅取得はローンに頼る。立地・構造や借入条件(1,500万円の自己資金を頭金にあて、2,000万円のホームローン)などはいちおう決めているが、無事にやってゆけるだろうか。老後の出発点は大丈夫だろうか。”

設計表Aには、この夫婦の今後20年間の生活経済が展望されている。展

望に際して前提されていることがらと表が記入された方法については、授業指導者が講義する。とくに、現在価額と将来価額の関係、ローン返済額の算出法、各種保険の原理・しくみや一般的な加入状況、所得税額の算出法、消費者物価指数の意義・算出法・変動要因などについては、それぞれに時間を確保して説明する。

試算の結果によると、20年後に正味金融資産残高が852万円になる。しかし、それまでの数年間、年度末貯蓄残高が継続的に負である。当然、このままでは生活は成り立たない。

図表1 経済生活設計事業のシラバス(全30時間、うち2時間は予備)



*...各自で表枠を工夫するのが望ましい

図表2 設計表A

網掛け数字はマイナスを表す

\ 年後		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
家族	(夫)	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60
	(妻)	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58
	(長女)	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
	(長男)	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
主なできごと	(長女の関係)	20 塾	20 "	20 "	50 塾	50 "	50 "	250 短大	250 "	-	-	-	-	-	300 結婚							
	(長男の関係)	-	-	20 塾	20 "	20 "	50 塾	50 "	50 "	250 短大	250 "	-	-	-	-	-	-	300 結婚				
	(自動車)	-	-	150 夫	-	-	-	100 妻	-	-	-	100 夫	-	100 妻	-	-	-	-	-	100 夫	-	-
	(旅行)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100 海外	-	-
	(その他)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	400 住居補修	-	-	-	-	-	-	-
	A 合計	20	20	190	70	70	100	400	300	250	350	-	100	400	300	-	-	300	100	100	-	-
B 日常生活費	270	270	280	290	300	310	300	310	310	310	320	320	320	310	310	300	290	290	290	290	290	
C ローン返済	122	122	122	122	122	122	122	122	122	122	122	122	122	122	122	122	122	122	122	122	574	
保険	(保険料)	11	11	11	11	11	11	11	11	11	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	9
	(保険料)	54	54	54	54	54	54	54	54	54	58	58	58	58	58	58	58	58	58	58	58	47
	(保険料)	63	63	63	63	63	63	63	63	63	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	34
	D 合計	128	128	128	128	128	128	128	128	128	141	141	141	141	141	141	141	141	141	141	141	90
E 直接税	47	29	32	33	35	34	36	52	53	53	52	55	55	55	54	53	53	47	47	46	49	
F 支出総額 (A + B + C + D + E)	587	569	752	643	655	694	986	912	863	963	635	738	1038	928	627	616	906	700	700	599	1003	
収入	(夫)	578	587	596	605	614	616	618	620	622	624	626	628	630	632	634	636	636	636	636	636	2136
	(妻)	70	70	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	80	60	50	40	30
	G 合計	648	657	676	685	694	696	698	700	702	704	706	708	710	712	714	716	716	696	686	676	2166
H その他の収入	-	-	-	-	-	子ども 保険	200	子ども 保険	200	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
I 収入総額 (G + H)	648	657	676	685	694	696	898	700	902	704	706	708	710	712	714	716	716	696	686	676	2166	
J 収支の差額(I - F)	61	88	76	42	39	2	88	212	39	259	71	30	328	216	87	100	190	4	14	77	1163	
K 年度未貯蓄残高 (前年K + J)	561	649	573	615	654	656	568	356	395	136	207	177	151	367	280	180	370	374	388	311	852	
L 年度未負債残高	1950	1898	1844	1788	1730	1669	1607	1543	1476	1406	1334	1260	1182	1102	1018	933	843	750	655	555	0	
M 正味金融資産残高 (K - L)	1389	1249	1271	1173	1076	1013	1039	1187	1081	1270	1127	1083	1333	1469	1298	1113	1213	1124	1043	866	852	

注1) 日常生活費、保険料、直接税、収入の現況については、総務省「家計調査報告」を参考にした。なお、「主なできごと」の費用、保険料、日常生活費の重複は避けている。

注2) ローン返済(年額)、年度末負債残高は、借入条件(元本2000万円、年利3.6%、期間300月)をもとに、下記の元利均等算式で出した。

$$\text{毎月返済額} = \{A \cdot r \cdot (1+r)^M\} / \{(1+r)^M - 1\} \quad \text{m回返済後の負債残高} = [A\{(1+r)^M - (1+r)^m\}] / \{(1+r)^M - 1\}$$

(負債元本; A 月利(年利/12); r 借入月数; M 返済済月数; m)

注3) 保険料は、保険料(「消費支出」に分類される損害保険、火災保険などの保険料)、保険料(「実支出以外の支出」に分類される生命保険、簡易保険などの保険料)、保険料(「非消費支出」に分類される厚生年金や国民年金などの保険料)に区分している。

注4) 直接税には所得税、市民税、固定資産税、自動車税などがある。

注5) 設計開始年の年度始貯蓄残高は500万円である。

2 経済生活設計学習と対話

(1) 問題点と改善案をめぐる対話

学生たちが積極的に参加するのは、ここ(第9回)からである。もちろん、自分たち自身の長期経済を設計するのではない。いわば親世代の経済生活に共感をもって接する、そして助言者として検討するのである(注1)。

まず、設計表Aをみて、問題点を洗い出す。「『主なできごと』のメニューが貧しい」、「学習塾通いは必要か」、「結婚費用は親だけが払うべきなのか」、「終身雇用してもらえるのか」、「妻の収入はなぜ数十万円どまりなのか」、「公的年金は頼りになるのか」、「ローン金利は妥当か」、「預貯金に利子が見込まれてない」、「物価変動が考慮されてない」等々、いくつもの問題点や疑問点があげられる。あるいは、「そうまでして一戸建て住宅が必要なのか」という辛辣な意見もあろう。

ある程度の問題が出されたら、それを「教育」「結婚」「旅行」「日常生活」「働き方」「住宅取得とローン返済」「保険」といった生活テーマに分類する。そして、テーマごとに、ディスカッションによって問題を深める。問題によっては、指導者が補足説明する。

ついで、改善の手だてを模索する。問題の内容ととらえ方に応じて、対応策はさまざまである。たとえば大学進学について、経費抑制の立場から「地元の大学へ自宅通学するとよい」「アルバイトしたり奨学金を受けるとよい」という意見もあれば、進学の意義を重んじて「本人たちが4年制大学を希望すればかなうように、準備しておいた方がいい」「自宅

を離れて生活してこそ自立できる」という意見もあろう。あるいは、結婚について、地域の慣行に従って「費用はすべて親が出すべき」という意見もあれば、自立をめざして「本人たちが払える、そんな結婚にすればよい」という意見もあろう。提案の内容によっては、詳細をインターネットなどで調べることができる。

多くの改善案が出されるであろうが、そのすべてを取り込むのは難しい。各自がいくつかを組み合わせ、説明可能な改善案とする。そして、設計表B(各自で枠を工夫して作るとよい)に試算を行い、再び検討する。以下に、一例をあげておこう。

(設計表Bの一例)

住宅取得計画の変更による支出の減少、住宅取得以外の生活部分の見直し、収入の増加(働き方や資産運用の見直し)という3つの改善方向がある。設計表Aをみるかぎり、住宅取得以外の生活部分の支出は控えめである。多少の増加があっても不自然ではない。

そこで、以下のように改善案をとりまとめる。

ア．新築住宅をやめて中古住宅にする。それにより、ホームローン借入額を1,200万円に減すとともに、12年後の補修準備額を500万円に増す。

イ．子供の進学先が4年制大学(大都市、アパート住い)になることも予想する。その代わりに、2~4年次の学費・生活費は各年200万円に減額する。

ウ．海外家族旅行を2回に増やす。

エ．妻と夫の働き方を変える。妻はパートをやめて、来年度から学習塾と花卉栽培を自営する。前者は、自宅の1室で、週の半分、1日5時間程度を使って、少人数の小中学生を教える。後者は、荒れかけている小面積の畑地の有効利用である。地域の友人や専門家の助言を得ながら菊などの花卉を栽培して、地元の市場に出荷してみたい。どちらも多くの人々と交流できるし、2つ合わせた収入は現在の収入を上回る。花卉栽培には、夫も定年退職(60歳)後に参加する予定だ。それまでは、土曜日に作業を手伝ったり園芸店や農場をのぞくなどして、将来の参加に備える。もちろん、初めの3年間は、わずかだが開業資金を拠出する。

オ．近場への家族旅行や営業の支出などがあるかもしれないので、準備しておく(100万円ずつ、2回)。

カ．自分なりのルールを作って、株式の売買に臨む。

生活資金として500万円を確保する。

年度末貯蓄残高が500万円を越えるとき、越えた金額の1/2以内で、各回ほぼ100万円分を購入する。

生活の必要に応じて売却する。

損失を被る確率が1/3と予想する(3回買えば1回は損。3銘柄に1銘柄は損)。また、利益の年率10%、損失の年率は-10%と仮定する。

以上のことをふまえて、図表3のように再試算した。

これによると、年度末貯蓄残高はほぼ連年正

であり、20年後には2,265万円が蓄積される。高齢前期に花卉栽培などで若干ながらも生活費が得られるので、設計表Aに比べて高齢期入り口の条件は良い。しかし、気がかりな点がいくつかある。

ア．1年分の生活資金をいつも用意しておきたいのに、年度末貯蓄残高が500万円を下回る年が9年、300万円を下回る年が7年もある。

イ．正味金融資産残高が長期にわたって負のままではよいのか。たとえば、住宅を売却したと仮定して、その価額の推移を記入しておいてはどうか。

ウ．難しいことではあっても、消費者物価や預貯金金利の動向を予想し織り込むべきではないか。前者に関していうと、経済社会が再編成されたり、温暖化等のなかで良質の生活資源が希少になると、物価上昇するだろうからである。また、収支のうちに物価の影響を受けるものと受けないもの(ローン等の契約的支出など)が混ざっており、後者の重みの趨勢をチェックしておきたいからである。

これらに関しても、さまざまな意見が出されることであろう。十分に議論したのちに、三たび設計表を作成するのもよいし、ここで終了してもよい。いずれを選ぶにしても、その理由を明らかにしておく。

(2) 経済生活設計を支える人間論

以上で、(第12回目まで)を終えた。対話への参加状況、改善案の内容、設計表の完成状況などによって、学生の努力を総合的に評価する。問題発見や改善提案に積極的で

図表3 設計表B

網掛け数字はマイナスを表す

\ 年後		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
主 な で き こ と	(長女の関係)	20 塾	20 "	20 "	40 塾	40 "	50 "	250 大学	200 "	200 "	200 "	-	-	-	300 結婚							
	(長男の関係)	-	-	20 塾	20 "	20 "	40 塾	40 "	50 "	250 大学	200 "	200 "	200 "	-	-	-	-	300 結婚				
	(自動車)	-	-	150 夫	-	-	-	100 妻	-	-	-	100 夫	100 妻	-	-	-	-	-	-	100 夫	-	-
	(旅行)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	100 海外	-	-	-	-	-	-	100 海外	-	-	-
	(その他)	30 営業 準備	50 "	50 "	-	-	100 予備	-	-	-	-	-	-	-	500 住居 補修	-	-	100 予備	-	-	-	-
	A 合計	50	70	240	60	60	190	390	250	450	500	300	300	500	300	-	100	300	100	100	100	-
B 日常生活費	270	270	280	290	300	310	300	310	310	310	310	320	320	320	310	310	300	290	290	290	290	290
C ローン返済	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	73	345
保 険	(保険料)	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	13	13	13	13	13	13	13	13	13	13	9
	(保険料)	54	54	54	54	54	54	54	54	54	54	58	58	58	58	58	58	58	58	58	58	47
	(保険料)	63	63	63	63	63	63	63	63	63	63	70	70	70	70	70	70	70	70	70	70	34
	D 合計	128	128	128	128	128	128	128	128	128	128	141	141	141	141	141	141	141	141	141	141	90
E 直接税	47	29	32	39	42	44	46	62	63	63	62	65	65	65	64	63	63	57	57	56	59	
F 支出総額 (A + B + C + D + E)	568	570	753	590	603	745	937	823	1024	1074	896	899	1099	889	588	677	867	661	661	560	784	
収 入	(夫)	578	587	596	605	614	616	618	620	622	624	626	628	630	632	634	636	636	636	636	636	2136
	(妻)	70	40	100	120	140	160	160	160	160	160	160	160	160	160	160	160	160	160	160	160	160
	G 合計	648	627	696	725	754	776	778	780	782	784	786	788	790	792	794	796	796	796	796	796	2296
H その他の収入	-	-	-	-	-	子ども 保険	200	子ども 保険	200	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
I 収入総額 (G + H)	648	627	696	725	754	776	978	780	982	784	786	788	790	792	794	796	796	796	796	796	2275	
J 収支の差額(I - F)	80	57	57	135	151	31	41	43	42	290	110	111	309	97	206	119	71	135	135	236	1512	
K 年度未貯蓄残高 (前年K + J)	580	637	580	715	766	697	738	595	553	263	284	281	90	7	199	318	247	382	517	753	2165	
L 年度末株式評価					100	110 100	121 110	108 99 100	119 108 90	131 119 99	107 108	118									100	
M 年度末負債残高	1950	1898	1844	1788	1730	1669	1607	1543	1476	1406	1334	1260	1182	1102	1018	933	843	750	655	555	0	
N 正味金融資産残高	1370	1261	1264	1073	864	762	638	641	606	794	835	861	1092	1109	819	615	596	368	138	198	2265	

注) 表1の ~ に同じ。

あったかどうかは重要な評価ポイントである。

ここまで学んできて、重い意見や質問が投げかけられることがある。その一つは、「難しくすぎて、一人では表が作れないかもしれませ

ん。」という意見である。

ローン返済額算出公式等も、たしかに難解である。しかし、学生が言う「難しい」は、多様な感受性を総合的に用いることの煩雑さに

あるようである。日本型雇用や公的年金制度に向き合うかと思えば、仕事や結婚や教育をめぐる生き方や文化に反省を加える。ロマンや夢を追う一方で、厳密かつ執拗に計算する。あるいは、こまめに資料収集する一方で、「ここでは金利を考えないことにする」などとあっさり仮定を設ける。こうした不安に対しては、「動機付けや感情移入ができていれば、何とかあります。」「自分が設計せざるをえなくなったときには、書けるものです。」と答えることにしている。

あるいは、「その通りに実現するかどうか分からないのに、なぜ設計するのですか。」という問いもある。

これに対しては、「あてはまらなくなったら、その都度に設計し直したらよいのでは。」とか、「複雑な経済システムで生活しているのだ

経済生活設計にとっての対話

前節では、経済生活設計の授業に対話が取り入れられる様子を見た。ところで、経済生活設計という行為にとって、対話が取り入れられることにどのような意義や必然性があるのだろうか。

考えられることの一つは、個人の胸算用のような孤独で直観的な設計が、対話によって開放されることである。そして、誰もが設計に

1 生活力の配分と対話

(1) 生活力の配分

私たちは貨幣所得や生活時間やエネルギー(心身の力)などの「生活力」をもつ。また、

から、私たちも設計的でなければならない。」「周到に準備して行動するのは、現代社会での基本的な生き方じゃないのかな。」などと答える。しかし、ほんとうに伝えなければならないのは、「その通りになる・ならない」を越えたことである。それは、「自分がもっている生活力を見通したり配分したり、イメージ(構想力)のもとに合理的に生きようとする設計こそは、すぐれて人間的な営みだ。」ということである。この点については第13、14回(図表1)で講義するのであるが、次節で、とくに対話の意義とむすびつけてみておこう。

(注1) 自由に設計してもらうと、設計内容のバリエーションが大きくなる。はじめて経済生活設計を学習する場合には、記入に関する斉一的な指導や対話の展開が困難になる。

参加できるようになることである。もう一つは、生活設計という行為の本質にかかわる。すなわち、生活設計という主体的な行為は生き生きとした「イメージ」(構想力)に導かれるが、対話こそはイメージが湧き出す重要な源泉であり、イメージが精細に仕上げられるステップである。

日々あるいは世代間の生命再生産の活動で、エネルギーや生活時間や貨幣所得を生み出す。このように生活力を実感できたり、再生産の

見通しをたてることができる。まずは、そのことに素晴らしさを感じるべきであろう。

他方で、私たちは、日々の衣食住、子供の教育、海外旅行、住宅の取得などの生活テーマをもつ。言いかえると、生命再生産、自己実現、幸福などの究極的な生活目的の下に、「健康・安全・快適に」「時代にふさわしい教育を」「世界に開かれた教養を」「安住できる空間を」といった中間目的をもつ。これらの生活テーマや中間目的に支え導かれながら生活や人生が運ばれる。そうしたテーマや目的に対して、貨幣や時間やエネルギーが「配分」されるのである。

経済生活設計は、しばしば節約の手段だと思われたり、「禁欲への自縄自縛」と勘違いされる。しかし、経済生活設計の本質は、「もっている貨幣（や時間やエネルギー）を余すところなく配分することによって最大の効果を得ようとする」ことにあり、創造的でさえある(注2)。このことは、前節の仮設例(“妻がパート従事をやめて新たな仕事に挑戦するなど、生活の全体が行動的になった”)からも見当づけられよう。

(2) 個人的直観による配慮

配分の過程を支え導く原理や原則は何か。たとえば、ミクロ経済理論にならって「加重限界効用均等の法則」を想定することもできよう。そして、

「13年後の結婚支出の1円当たり限界効用」の現在量
「12年後の住居補修支出の1円当たり限界効用」の現在量
：

「各年の日常生活費支出の1円当たり限界効用」の現在量がたがいに等しい、などと推測することも不

可能ではない。しかし、生活経済の全体を見通し、財・サービスの必要・不必要を見きわめ、支出の緊要度を考え合わせて、直観的に「配慮」しつつ配分する。これが実際であり設計者の実感であろう。

「配慮」ということについては、「生活力」「配分」とともに、かつて大熊信行氏が重視した(注3)。彼は、経済活動の主体が精妙なまでの配分力量をもつことを説いた。しかし、その力量が「配慮」という生活設計者の個人的な直観ないしセンスにあるかのように言われると、面食らってしまう(注4)。誰もが好ましく配分できる、そんな保証がなくなるからである。

この当惑は、今井光映氏らがアメリカのホームエコノミックスから取り入れた「システム」の生活観によって乗り越えられる(注5)。

(3) 配慮のマニュアル化

システムとは、要素と要素の関係からなる全体である。たとえば、家庭生活は、家族員、建物、家財、貨幣、情報などの相互関係からなるシステムである。同じく家庭生活は、日々の衣食住、教育、住宅取得、仕事などの行為要素群の関係からなるシステムである。あるいは、価値観や資源などのインプット要素、生活経営というスループット要素、満足や成長などのアウトプット要素という関係からなるシステムでもある。そして、システムを構成する各要素は、それ自体がシステム(=サブシステム)であることも多い(注6)。

システムにおいては、人と人、人と物、物と物のあいだに望ましい関係を求める心や問題解決の心がたえず働いている。そのもとで、

<各サブシステム内での、諸要素とそれらの相互関係のあり方の検討>、<家庭生活という全体システムのレベルでの、諸サブシステムの調整>、<全体システムからサブシステムへのフィードバック>が展開する。その過程でさまざまな事項について意思決定され、一人ひとりの欲求や価値観や考え方が再認識され家庭生活の目的も了解される。

たとえば、自動車購入の意思決定を例にとると、“便利で格好いい車を買って満足”するだけでは不十分である。

自動車が購入されると、経済面で日々の衣食住や教育や家族旅行のサブシステムに影響が生じたり、時間利用面で職業生活や家事や趣味活動のサブシステムに影響が生じる。あるいは、駐車や騒音や路上の安全とかかわって、近隣との交際システムにも影響が生じよう。各サブシステムに生じるかもしれないそうした変化を予想し、新しい活動のあり方を模索することが、まず重要である。ついで、すべてのサブシステムをつき合わせて、矛盾がないかどうかをみる。そして、問題点については、各サブシステムで是正する。そうすることにより、自動車には、たんなる交通手段やたんなる奢侈品にとどまらない、よりよい意義が見出されるようになる。購入する家族にとっては、趣味や職業をさらに生き生きと展開したり、隣近所を気遣う気持ちが生まれるなど、さらに自己実現に近づくことができる。

2 イメージの喚起と対話

生活設計はすぐれて能動的な営みであり、三木清氏が言う意味での「技術」である(注8)。

そこまでの見通しと心の働きが作用してこそ、良い意思決定がなされる。そして、自動車を取り入れた新しい生活システムが形成される(注7)。

以上の過程が家族員のあいだでの開かれた対話に支えられて展開するとき、大熊氏という「配慮」が果たされる。個人的直観による「配慮」がサブシステム間の連携と複数人の対話でなされるようにマニュアル化されるのである。

(注2) O.F.ゴットル氏による「経済」の定義でもある。

(注3) 大熊信行氏は、第一次世界大戦後から高度成長期にかけて、限界効用学派の経済理論研究から出発して生活経営論を構想した。

(注4) 大熊氏は、「主婦」という生活経営者の配慮に強く期待した。

(注5) 今井光映氏は、ドイツやアメリカなどの生活経営学の原理を紹介した。ここでシステムの生活観の紹介は、主に今井光映「家庭経営システム論」(小国弘司・今井光映・今村幸生編『現代家庭経営学』、1985年、勁草書房)によっている。

(注6) R.E.Deacon&F.M.Firebaugh “Family resourcemanagement”(Allyn and Bacon, Boston, 1975)による。

(注7) 前掲今井「家庭経営システム論」おける「電子レンジ」の叙述(8頁)をヒントにしている。

そして、いくつかの条件が備わるとき、技術としての生活設計が円滑に展開する。

(1) イメージ

献立の全容や食べられる風景がわかっていると、料理人は調理しやすい。行き先と用務がはっきりしているとき、自動車の運転はスムーズである。このように、イメージに先導されるとき技術は円滑に展開する。

同様のことは、経済生活の設計についても言える。実現したい風景や姿が、あるいは一つのテーマや中間目的が明らかであってこそ、よく設計できるからである。逆に言うと、開始にあたって目指す姿やかたちがイメージできない行為は、強迫、衝動、あるいは慣習に支配された没主体的な行為であり、生活設計の定義に反する。

(2) 願望と法則の統一

イメージとともに、こうありたいと思う。その願いが原動力となって、化学や電気工学の知識が、栽培の知識が、あるいは平等志向などの実践理性の知見が展開する。主観的な願望と客観的・法則的な知見が統合されて、自動車が、りんごが、暮らしやすい街がつけられる。その意味で、客観的・法則的な知見は重要である

経済生活設計においても、同様である。そこでは、金利や物価をめぐる経済学的知見、統計的に観察される傾向についての知見、法律的な知見などが駆使される。難しいから、面倒だからという理由でこれらを避けるのは好ましくない。

(3) 習慣化とイメージの消失

たとえば、りんごの栽培法が新しく提案される。実施に移され、1年、2年...と肥培管理が繰り返され、やがて実り収穫される。それ

だけの期間を経てようやく栽培技術として定着する。同じように、生活設計の内容が定まり、実施に移される。1月、2月...あるいは1年、2年...と実行されるうちに目指された生活に近づく。このように、りんご栽培であれ生活設計であれ、習慣化することによって技術として成就し成果が現れる。技術は習慣化を前提するのである。

そのことから逆に心配されるのが、生活設計の惰性化である。設計事項をひたすら律儀に守り続けたり、はじめの心が忘れ去られて機械的習慣になってしまうと、やがて惰性に陥る。そこでは、心身にストレスが生じることもある。あるいは、現代では、生活の外の技術システムに影響されて惰性化することもある。模擬試験から大学入試センター試験にいたる機械システムのもとで進学の設計と学習が習慣化するなかで、大学への瑞々しい憧れが薄まることがあるのは、その例である。いずれにしても、しなやかで生き生きとしたイメージが失われるとき、習慣化の好ましくない側面があらわになる。

(4) イメージの活性化と対話

こうして、イメージの喚起が、少なくとも二度にわたって求められる。一度は生活設計の開始時において、他は生活設計の実行途上において。そして、いずれの場合にも対話は有効である。とくに、惰性化に陥ったときには、移り変わる生活状況にてらしながら設計の意図と内容を確かめ合うことが大切である。

以上の配分論、イメージ論からわかるように、経済生活設計は本質的に設計当事者たちの対話を必要としており、対話を通して経済生活

設計はしっかりとしたものになる。

(注8) 三木清『哲学入門』(岩波新書、1940年)

を参照のこと。

大学教育と経済生活設計学習

以上、対話をとり入れた経済生活設計の学習についてみてきた。もちろん、設計の主題は、

でみたような住宅取得とローンだけではない。働き方、起業、生活保障のためのポートフォリオなど、じつに広範囲にわたる。そして、経済的なことがらに端を発しながら、人生や文化や社会のあり方にまで関心を向ける。その意味で、この学習については、家政学や生活科学を越えて大学教育の全体(共通教育など)において必要性和可能性が高まっている。

たとえば、公教育で“金銭”にふれる機会が乏しく、利子に関する具体的な教育を受けないうままに奨学金貸与を受けたりクレジットカードを作る。こうした不自然さを緩和することは金銭教育の課題であるが、大学生向けの金銭教育メニューの一つとして対話型の経済生活設計学習は効果的であろう(注9)。

あるいは、大学生たちは生活や仕事の実体験が乏しく、仕事についての考え方も未成熟である。そのために、就職活動で無用に苦しんだり就職できても早く離職する者が多い。そこで、多くの大学では、入学後間もない時期

から職業観を培うキャリア形成教育を始めようとしている。模擬面接やインターンシップなどとともに、自己に潜在する力を再認識し自分にふさわしい進路を選び取るトレーニングもなされつつある。そうした意思決定トレーニング・カリキュラムに、同じく意思決定トレーニングである経済生活設計学習を取り入れることは有意義であろう。

これらは、対話を学習の手段としてとり入れる授業であるが、対話という過程をさらに重視する傾向もうかがわれる。たとえば、近年、他者の意見に耳を傾けるのが苦手な独断的思考したり行動する学生が多いと言われる。そのような学生たちに課題達成や問題解決のチャンスを提供して対話を促す、そして他人の意見を取り入れながら自分の考えを築くトレーニングをしてもらう。いわゆるPBL(problem / project based learning)であるが、ここにも経済生活設計学習を取り入れることができよう。

(注9) 米川五郎氏(愛知教育大学名誉教授)が主宰する金銭教育に関する研究会に参加する機会を頂き、示唆を得た。